The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞飯倉洋一著『上田秋成　絆としての文芸』
Author(s)	中井, 陽一
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 157-157
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

飯倉洋一著　『上田秋成　絆としての文芸』

中　井　陽　一

本書では、『雨月物語』の作者として知られている上田秋成（一七三四～一八〇九）は、当時、歌人・国学者・茶人として有名で、これらに関する多数の著述があると述べている。そして、本書の目的を「文人秋成の著述を新しい観点からとらえなおし、その魅力を読者諸賢にお伝えしたい」としている。

「序章　新たな秋成像を求めて」。「江戸時代の文芸を、人との繋がりを築いていくツールという視点で見直していく必要がある」と副題の意味を説明している。また、ここには、「雅文芸と俗文芸」、「写本と刊本」等の説明がある。

「第一章　秋成の人生を読む」。「失うたびに開かれる世界」として、「実父母を失う、上田家に養われる」等、秋成の一生を通じて、失ったものと、それによって得られたものを対比している。秋成は、一七九三年の六十歳の時に、大坂から京都に居を移すが、出来事を大坂と京都とに分けて書いている。

「第二章　歌文で繋がる　―大坂で知り合った人びと」。妻の瑚璉尼、国学の師加藤宇万伎、後に懐徳堂堂主になる学友の中井竹山と弟の履軒、友人の木村蒹葭堂と与謝蕪村、論敵の本居宣長について、秋成との関係、事跡、筆者の考え等を随筆集『胆大小心録』、歌文集『藤簍冊子』等を参照して述べている。

「第三章　歌文で親しむ　―京都で交わった人々」。この章は、歌人の小沢蘆庵と蘆庵社中、妙法院宮真仁法親王と正親町三条公則、歌人の伴蒿蹊と和文の会についてである。蘆庵とその門人たちが、秋成を経済的にも精神的にも支えていたという。妙法院宮とは和歌を通じての交流があり、公則には土佐日記・万葉集の進講していた。また、蒿蹊の主催する指定された題の文章を書く「和文の会」に参加していた。

「第四章　秋成が感謝する神々」。秋成は、五歳の時に痘瘡を罹ったが、加島稲荷に祈祷したところ六十八歳の寿命を与えるという神託を得た。六十八歳を迎え、自詠六十八首とともに公家や知友の和歌を奉納した。また、六十五歳の時に両眼を失明するが、眼科医、谷川三兄弟の治療で左目が回復した。「神医」として感謝し、多数の和歌軸等を贈っている。

「第五章『雨月物語』『春雨物語』を読み直す」。『雨月物語』は秋成が三十五歳の時の作品で版本である。「菊花の約」の筆者の新しい解釈がある。『春雨物語』は晩年の作で、写本である。異本の解説やモチーフの「いつわり」の考察をしている。

本書は、筆者の上田秋成研究の成果をまとめたものであるが、研究書というばかりではなく、一般の人たちが秋成を理解し、江戸時代の文学そのものを理解する上で有用な著作である。

（大阪大学出版会、二〇一二年十二月、二五八頁、二、〇〇〇円）

（なかい・よういち　本学大学院博士前期課程）